

皆さん、こんにちは。セブ島NGO代表濱野が、今回もセブ島から16番目の会報をお届けします。



さて、毎年、この時期はこちらの大学の前期後期、小中高では全4学期の内、1,2学期を終了したところで10月末、現在はハロウィーン休暇までを含んだ中間休みに入っております。昨年の会報では、私が3度目のデング熱に感染し、半ば、死すら意識するようなどころまでの体験を一部御披露しましたが、それから、あっという間に1年が経ったような、或いは、あれから既に数年も経ってしまったかのような…非常に奇妙な時間の流れ方を感じております。



さて、前回の会報では、岐阜県の県立岐南工業高校で私が講義をさせていただき、その講義を受けた生徒さんの中から数名が実際にセブ島へ来て研修をして頂く云々とした内容を記載しましたが、実はこの原稿を書き上げているタイミングで6名の高校生諸君と、2名の引率の先生の受入を果たすことが出来ました。また、この機会においては、単にNGO活動の見学に止まらず、私が実際にセブ島で運営に携わっている日系企業の工場見学もして頂きました。





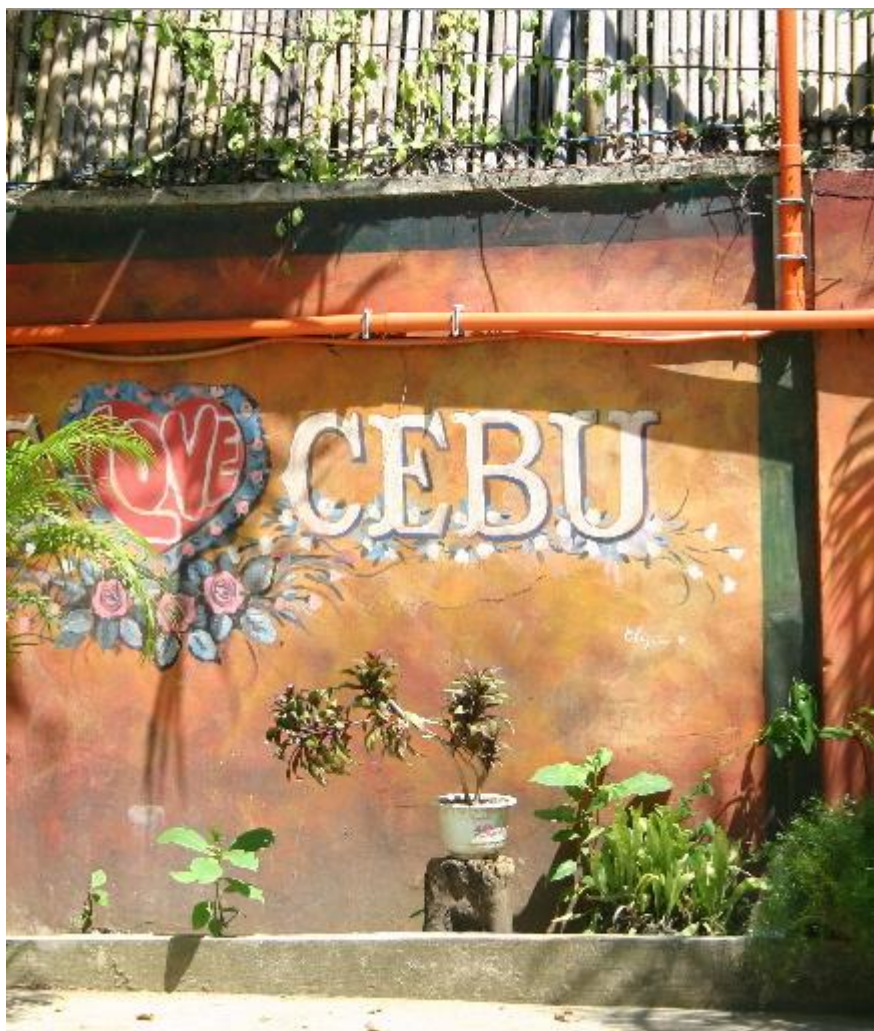
実は前回の講義の中で、私の日系企業サポート業務の中での実体験を御披露した事もあり、御参加の高校生諸君、引率の先生方には、その現場検証をして頂いたような形です。また、その約1ヶ月半前、9月期には、毎年恒例となった中央大学学生サークル POCOPOCO の受入、彼ら主催の音楽会への協力もさせて頂きました。



上記文章の中でも仄めかしておりますが、私は今、私自身の生計を成り立てる為に週の大半を日系企業での勤務で費やしておりますので、こうしたイベントの機会を通して、普段、疎遠になりがちな奨学生たちとの密な交流を持つ事が出来、大変に有難くもあるのです。

1. ボランティア活動とは？

さて、このテーマについては、これまで幾度と無く取り上げて参りましたが、日本での一般的な捉われ方は、やはり、‘無償で行う慈善事業’とした形が主流だと思われます。ところが、中身をよくよく見てみると、本来のボランティア (Volunteer) という英語を語源とする用語の本来の意味を見ていると、寧ろ、‘自発的に特定の活動に参加する人’というのが本来であり、こうした概念が日本語に取り込まれた際の色んな経緯で、日本語の片仮名英語の‘ボランティア’には、‘無償’という意味合いが強く付加されてしまったと言うのが本当の所のようです。



そんなところで、私たち‘プルメリア’で行われている活動は、どうなのかと言え、数年前までは、私が、この活動に自分の時間の殆どを投入して来たので、決して‘無償’ではなくて、報酬を頂きながら、行って参りました。それでも楽ではないのでアルバイトを併用して来ましたが、現在では、その‘アルバイト’に主な時間を割いている形です。

ところが、今の状況は、先にも述べましたように、基本的には私の生計は私自身の稼ぎで成り立たせている訳で、日本語で言う所のボランティアと、本来のボランティアの中間的な存在となり、資金難の折も折、場合によっては私の手持金を一時立替、資金繰りが少し楽になったタイミングで、経費のみを後ほど充填して頂く等々の措置も少なからずとっており、非常に大変ではありますが、現存する奨学生たちの事もあり、中々、止められないのが実情です。



どうにもならない現実を突きつけられれば、嫌でも止めざるを得ないが、何故か不思議と続けられるような展開になって来て、続いてしまっている不思議な活動ではあります(苦笑)。私は、現状、通常の経済活動と所謂NGO活動(日本で一般的な認識はボランティアの一種)の両方に携わっておりますが、やはり、言えるのは、ここへ日系企業が進出して来るのは、ローコストオペレーション(Low cost operation)が可能である事(即ち日本で日本人労働者を雇うよりも相当に低い賃金で雇えること)が最大の理由であり、それは、実際には、物価が安くて、その分、賃金が低いという事ではなく、それ以上に給与水準が低くても、人材を集めることが可能だから…というところです。

それ故に、企業の利益に結びつく事であれば、教育費等を投資し、それ以上のリターンを得られれば良いのですが、少なくとも数年以内のリターンを求められないところに金をかけられないのが、企業の宿命なのです。ところが世の中の仕組みの中では、必ずしも即時リターンを求められない、或いは、見返りで計れない部分があって、先進国では‘そうした部分’を公的機関(要は公立校での教育)がカバーしているのです。

逆に言えば、よく‘国家百年の計’と言いますが、ここが出来るか出来ないかが先進国と途上国の差、もっと言えば、表現は悪いですが、現実的な問題として、‘主人と使用人の差’になってしまうのですが…(或いは嘗ての宗主国が支配を徹底する為に作為的に、そのように仕向けたとも言えます…)そうしたところが、ここフィリピンのような発展途上国では、上記の事情により、マトモに機能していないこと、更には、通常は物価レベルが先進国より低い事もあって、先進国→途上国という図式で、これまで教育支援を始めとするNGO活動が盛んに行われて来たと思われま

ところが、最近、フィリピンの物価が円安の影響もあって、必ずしも日本よりも安いとは言えなくなって来た為に苦戦しているのが現在の私たちブルメリアの実情です。



2. 学生さんたちの受入、若い人たちとの交流を通して…

先に述べましたように9月初め、5年程前から恒例になった中央大学学生サークルPOCOPOCOの受入を行い、一部の奨学生宅の訪問をすると同時に彼ら主催の音楽会開催に協力しました。大学生の修学期間は4年間であり、こうしたサークル活動については、最終学年(4年生)には、彼らの就職活動がメインになる事もあって実質、3年間の期間しかないのです。彼らとの御付き合いも、ほぼ二周りしたような感じになります。また、こうした活動がベースにあって、同じような仕組みで今回、10月には岐阜県の高校生諸君を同じような形で奨学生宅へ御案内した格好です。



そうした中で、日本の学生諸君の疑問として、ここセブの貧困家庭(即ち奨学生たちの家庭)は、どの程度の生活をしているのか…と言う点が、ほぼ例外なく聞かれるところですが、やはり、この部分、日本で普通に生活していると捉えられない部分であり、もっとそれが大きな疑問となるのは、実際に、こうした日本の若い人たちが現地入りして滞在中で出来るだけ食費を切り詰めた積りでやり繰りしても、その実、彼ら一人が一食に使う金額が、こうした奨学生の世帯5人以上の1日分の食費になってしまったりする事です。そして、特に最近、こうした日本の学生さんたちの印象として、食費他、実は、現地セブのそれは、日本のそれと、ほぼ変わらないという事です。



この現象は、ここフィリピンが過去から今までに至るまで、物価上昇が年率8%前後で推移して来たのに対し、日本の物価が、ほぼ横ばい(場合によっては下落)で来た上に、昨今の円安という要素が加わった結果ですが、そうした中であっても、フィリピンの一般的世帯収入はこうした物価上昇に全く追いついていないのです。

以前から何度も同じような事を繰り返し言って参りましたが、日本人の感覚では、ここフィリピンの庶民の生活とかを類推する事は不可能であり、数年前の例になってしまいますが、名古屋大学大学院で就学していた私たちの元奨学生であるブライアン・アスキー君が当時名古屋での1ヶ月の食費について月額 5,000 円もあればセブでの食生活よりマシと言っていた事に逆に合点が行くのです。ただ、こうした貧栄養の状態は、その実、幼児期の脳の発達にも大きな影響を与えるようで、遺伝的には、大きな相違の無い同じモンゴロイドの日本人とフィリピン人の平均IQは、日本人 105 に対してフィリピン人は 86 と言う調査データもあります。断定的な事は決して言えませんが、私が、ずっと見ていて、やはり大きく影響しているのは環境と栄養の 2 点だと思われれます。

それと言うのは、私は大学時代の専攻の関係で、栄養学の基礎知識があるので、数年前に地元セブの食材を使って、何とか、必要最低限の栄養を摂取する為のメニューと、それを作る為の食材費を計算したところ、それだけで月間、平均的なレベルの世帯の総収入を上回ってしまう事が分かり、愕然とした事もあったからです。



3. 知識・技術レベルの差

さて、今回の岐阜県の高校生諸君は、セブではトップレベルの大学の工学部への訪問もされた中で、彼らの印象を聞くと、その設備の面で、岐阜県の県立工業高校の方が寧ろレベルが高いかも知れないとの事でした。そうした事にも関連しますが、今回、同御一行が、プルメリアの里子宅を訪問した際に、セブ市南西部に位置する、日本のODAによって作られた埋め立て地(通称SRP: エス・アール・ピー: South Road Property)の見学を急遽行われ、そこで起こっている‘不具合’を、御一行の中に土木科の生徒さんも居られた中で、担当の先生が説明されたそうです。

この埋立地は、そもそも、ODAを通して、日本のゼネコンによって作られたものですが、その海に面する部分には日本では良く見かける‘テトラポッド’が敷き詰められているのです。…このテトラポッドというもの、実は商品名であり、正式には、‘消波ブロック’と言うようですが、その機能は、文字通り、波の力をそこで分散させ、海岸線の侵食を防ぐ事です。要は、その独特の形状があってこそその消波機能なのですが、今、ここセブのSRPで行われている事は、用地の効率的利用のように見えて、機能の損壊を行っているのです。

簡単に言えば、テトラポッドのキモである、テトラポッドとテトラポッドの間に出来る隙間にコンクリートを打って土台にし、その上に建物を建てているのです。そのせいで消波機能が失われ、結果、侵食が起こり、その部分が沈降しはじめているという始末です…。こうした事は日本ではあり得ない事ですが、現実として、起こってしまうのがフィリピンという国の実情です。先ほどの御話の中で、ここでは一流と目される大学の工学部の設備が日本の県立工業高校の設備に劣るかも知れないという所にも、そうした事が現われている訳です…。簡単に言えば、知識とか技術の欠如と言う事になりますが、もっと言えば、国家レベルでの‘考える力’の欠如と言っても過言ではないでしょう。



これには、‘何故、何’を考えず、ややもすれば、何でも‘神の思し召し’とか、‘悪魔の仕業’で物事を片付ける習慣と
いか文化背景が色濃くあるので、問題の根は非常に深いのです。



4. 何故、この国は変わらないのか…

こうなっている背景には、やはり知識レベルというか、教育の裾野が全然、広がって居ない事があります。

元々、植民地をベースとした、この国では、高度な教育は、特権階級のモノであり、その特権階級たるや、別段、今の状態を変えなくとも、そのシステムによって、常に‘今がベスト’の状態が保証されてしまうので、先に進むことはありません。また、もっと言えば、こうした状態の中で奇跡的に‘現状を変える必要に迫られている者’が高度な教育を受ける機会を手に入れ、それなりの技術を身に付けたとしても、コネクションが無いばかりに、自然に外(海外)へ出るように仕向けられてしまって、海外で花を咲かせることがあっても、この国の旧態依然とした仕組みの中では、戻って来て活躍の場が提供されないのです。結局、頭脳流出が止まらないのです。



実は、最近、前出の名古屋大学大学院を修了したブライアン君から連絡があり、フィリピンの教育の世界に戻って来たい(元々、彼はセブの教育大の出身で教師の国家資格を取得しています)との事で、私も嬉しかったのですが、現実はと言うと、大学教授の世界も実はコネクションで成り立っており、幾ら彼が日本の名古屋大学大学院を修了したとした証書をもってしても有力なコネクションが無いので、非常に難しいと嘆いていました。

以前、彼が名古屋大学在学中に良く言っていたのは、名古屋大学には彼の他にも国費留学しているフィリピン人が少なからずいたが、そもそも、彼らは、フィリピンの特権階級の出であり、国費で来なくとも、私費でも来られる筈なのに、‘何故か’国費を使って来ているとの事でした。また、そうした連中は、そもそも、フィリピンでは搾取する立場にあり、何もしなくとも天国の状態にある為、本当の問題が何も分かっていない…と。



…そんな訳でブライアン君は、こちらへ戻って、以前の職業であるハイスクールの教師として職を求める算段でいるようです。これについては‘折角日本でキャリアを積んだのに’と言う見方もありましようが、ちょっと見方を変えれば、自身の待遇は以前から改善されない中でも、この国に戻って教育者としてやって行くとした彼の生き方は寧ろ、賞賛したいと思います。職業とか待遇は以前のままだとしても、日本での教育とか生活、異文化に触れた体験を持つ彼は、明らかに以前とは違う筈で、そうした彼が、フィリピンの育ち盛りの若者たちと触れ合っていく事で、そこにどんな‘変化’が生まれるのか楽しみにしています。



現地NGO法人 代表 濱野 真道

Plumeria Cebu Educational Association Inc.

Unit 4, 918 Freedom St., Peace Valley, Lahug,

Cebu City, Cebu, 6000, Philippines

TEL/FAX 63 32 417 2302

現地セブ市 Mobile Phone # 0999 336 4649

Skype In # 050-5534-7425 (From Japan Only)

※特定非営利活動法人プルメリア本部事務所

〒502-0817 岐阜県岐阜市長良福光 2463-1 サンジェムビル

NPOプルメリア本部事務局 担当:中島吉徳